

I 小学校部会

国語科部会(低学年の部)

研究主題 確かな言葉の力を身に付け、豊かに表現し合う子どもの育成
～思考力を深める学び合いを通して～

1 主題について

表現力を高めるためには確かな思考力（論理的思考）の深まりが必要であると考え、このテーマを設定した。今年度も思考力を深めるための学び合いはどうあればよいかに焦点を当て、授業研究に取り組むことにした。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月13日	第1回総合研究会 研究主題確認・年間計画作成	6月15日	交流授業（花岡小学校）
9月22日	指導案検討会（扇田小学校）	10月25日	第2回総合研究会 授業研究会（扇田小学校）

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成23年10月25日（火） ・会 場 扇田小学校
- ・単元名 1年 じどう車ずかんをつくろう「じどう車くらべ」 ・授業者 津幡 操

① 協 議 今回はワークショップ型協議を行い、出た意見を代表者が発表する形をとった。

〈良かった点〉

- ・初発の感想を生かして子どもの思いをもとに本時に入っていた。
- ・音読に普段の積み重ねが見え、姿勢や音読のスピードが良かった。
- ・読み取りのために目を付ける場所を示し、見通しをもたせて取り組みやすくしていた。
- ・「ことばのひろば」で言葉が大切に指導されていた。模型、写真が内容を理解しながらまとめに入っていくための手立てとなり、最後まで授業に活用できるように学習環境が整えられていた。
- ・問いの文の文末と対比させて答えの文を探させており、読んだことを確認するペア学習が良かった。
- ・「しごと」の後に「つくり」と分けて行っていたので、サイドラインが引きやすかった。
- ・終盤での相違点を探らせる活動とクイズ作りがまとめとして良かった。

〈改善点〉

- ・めあての「ひみつ」がない方が、「しごと」と「つくり」で明確化できるのではないか。
- ・単元を通しためあてに関連したものを本時のめあてにしたい。例「ずかんのクレーン車のページをつくろう」
- ・低学年の学び合いの学習形態はどうあるべきか。
- ・「しごと」を探したところでシートに書かせると、途中に活動が入ってよい。最後にまとめるにはシートの量が多い。大体の子どもが書けていたが、個に応じて支援していく手立ても必要になる。
- ・比較の視点を与え、クレーン車の特徴を押さえ、学び合いの場面にしたい。

【ワークショップ型協議の様子】



②全体協議 主に四つの話題について話し合った。

- ・学び合いの授業の中での位置付けについて：自分の考えや意見を自然な形で自由に出し合ってみることで分かり合うことができるのではないかと。
- ・「ひみつ」をめあてに入れる必要性について：本時の学習では単元を貫く「図鑑づくり」を意識させる場面がなかったため、シートを図鑑に使えるようにしてはどうか。
- ・前時までの自動車と比較する学習活動について：比較することについて、違う点だけ焦点化すればクレーン車の特徴が出てくるのではないかと。
- ・シートの量について：全文を書くのであれば、サイドラインには色を付けたい。一年生は虫食いでいいのではないかと。

(2) 指導助言（花岡小学校 虻川 真喜子 教頭）

- ・張りのある大きな声で音読ができ、学習訓練が身に付いている。教師が、子どもの言葉の間違いやブレをその都度確かめて直すなど、言葉を大切にしている。また、理解を助けるための「ことばのひろば」の活用や、並行読書を大切にしている点が大変よい。
- ・子どもたちに学習パターンが身に付いており、前時までの学習内容もしっかり身に付いている。見通しをもち、意欲的に取り組んでいた。学級経営のよさが授業に表れている。
- ・前時までの学びを生かし、できることをどんどん進めてもよい部分があった。「しごと」と「つくり」へのサイドラインは、直接引かせてもできたとと思われる。
- ・3次の図鑑づくりのための本時であることを意識させてほしい。本時の分を後で書くよりもそのまま図鑑につながるシートにして、増えていく形にすれば意欲も高まるのではないかと。
- ・クレーン車の特徴を理解させる上で、前時までとの相違点を設けたことはよかった。本時は学び合う場を設定しにくかったが、ここで思考させ学び合いをさせることもできた。
- ・言語活動のねらいは、思考力・判断力・表現力を付けることである。実生活に生き、実生活とつながりのある言語活動を取り入れていきたい。つながりがあればあるほど、子どもの意欲も高まる。

<言語活動4つの原則>

- ①本単元で付けたい力の見極め ②付けたい力にぴったりの言語活動を選定
- ③言語活動を単元を貫いて設定 ④児童の「大好き、知りたい、伝えたい」を重視
- ・図鑑には余計な情報がたくさんあり、教科書のように分かりやすく書いているものはない。2次で図鑑の読み方に触れていないと、3次に自分で書くことは難しい。実際に図鑑から「しごと」と「つくり」を見付ける学習を2次で取り入れることで、3次の図鑑づくりを自分の力でできるようにしたい。
- ・3次で必要な図鑑を読む力を2次でどう付ければよいか、そのために1次でどういう導入をすればよいか（モデルを示す）、というようにゴールから考えた単元構想が大切である。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・新しい教科書で1、2年生ともに授業研究ができ、改訂のポイントがつかみやすかった。
- ・授業後の研究会をワークショップ型で行うことで、授業の視点に対しての成果と課題がクローズアップされてよかった。また、課題について全体でさらに話し合うことができた。

(2) 課題

- ・低学年の学び合いのさせ方
- ・単元を貫く言語活動の設定の仕方

国語科部会(中学年の部)

研究主題

確かな言葉の力を身に付け、豊かに表現し合う子どもの育成
～「読むこと」の領域における実践～

1 主題について

一昨年度から継続した研究主題を設定し、『読むこと』の6指導事項の中で特に、文学的な文章の解釈や自分の考えの形成及び交流について重点として取り組むことにした。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月13日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	10月25日	第2回総合研究会 授業研究会(早口小学校)
8月29日	指導案検討会(早口小学校)		

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成23年10月25日(火)
- ・単元名 4年 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」
- ・会 場 早口小学校
- ・授業者 工藤 秀悟

① 授業者から

- ・子どもの感想としては「ごんと兵十が分かり合えた。」「ごんって優しいんだね。」など表面的になってしまった。考えを深めるための手立てはどうあればよいのか。
- ・今日は兵十の気持ちがどう変化しているかとらえられればよかった。5場面までは、ごんの気持ちを考えるのが中心だった。兵十にとっては、いつも「ぬすつとぎつね」。ごんの気持ちの変化はとらえづらい。兵十やごんの気持ちをとらえるための発問が必要だったか。

② 協議

- ・今日扱ってなかった文の中にも気持ちを表すものがあった。(こっそり…など)
- ・ヒントカードによって、どの子も先生が作った通りの行動のみ拾っていた。その他の行動からも気持ちをとらえられる。「神様のしわざ」→気付いてくれないが、それでもまた行く気持ち、「さんまを投げ入れ→くりをきちんとかためて」の行動の気持ちなど。
- ・ごんが「うなずく」というのはイエスなのだ。これを考えさせるとよい。
- ・「どこで分かり合えたと思うか。」と問い、子どもたちに探させるのはどうか。「ばたりと取り落とした」「ぐったりと目を…」などいきなりここでもよかったのではないか。
- ・「火なわじゅうを手を取っている」「戸口を出ようとしている(もういたずらしない)ごんを撃とうとしている」どれだけ憎しみが強かったのかが分かる。
- ・「青いけむりが、まだつつ口から細く…」なぜこの一文を入れたのかを話し合う方法もある。これによって、「ごんって優しいんだね。」という表面的なものに終わらないと思う。
- ・ごんのつぐないの気持ち…今までどれだけのことをやってきたのか。ごんの気持ちがつまっていたことに気付かせたい。
- ・「変化」ということがとても大事だと思う。「どこが一番大きく変わったのか。」子どもたちに文を示させ、根拠を挙げさせたい。
- ・兵十の気持ちはとらえられたが、ごんの気持ちのおさえが足りなかった。兵十の気持ちは1の場面の後、6の場面になる。2場面から5場面でも少しずつ触れていけばいい。兵十が「目を落とした」「かけよった」などに着目させて。
- ・本時同じような活動が2度なされた。(3の活動と4の活動)ここを根拠に考えさせたいというところだけノートに書かせたい。



【兵十の気持ちについて話し合う】

- ・「撃ったのはだれかな。」→兵十が撃つわけではないと思っていた。子どもたちは行間を読んでいた。先生は「兵十の家だから兵十だろう。」と言ってしまった。
- ・発表の少ない学級は書いてから話させるが、このクラスは話合いがすぐできるかも。話し合わせてから書く方法もある。自分のを最初に書かせていると、それに固執してしまう。課題も子どもとやり取りしてから決めると食いつきがよい。
- ・学習計画のところでは課題を作ると課題を作っているうちにレベルが上がっていく。スタートのレベルが高くなる。

(2) テーマ研究

部会テーマを受け、「読むこと」の領域における実践事例を出し合った。

(3) 指導助言（中井 淳 指導主事）

- ・リラックスした雰囲気ではじめたが、課題が出された後は集中して取り組んでいた。音読の声量も適切である。「元気に読む」ではなく「適切な音量で読む」ことが大事。（中学年）ノートも見開きで広く使っていてよい。話合いをして分かったこと（友達の意見）を書いていくなどしてノートで思考を高め、一時間での変容が分かるようにしたい。

【考えていきたいこと…「焦点化」について】

☆学習活動を焦点化

- ・ねらいに端的に迫るために学習活動を整理すること。行動を書き抜く活動は必要がない。
- ・根拠となる叙述を、子どもから出た言葉そのまま板書していたので大事な言葉が抜けていた。叙述に即さず、教師が勝手に要約してしまうのもいけない。

☆課題を焦点化

- ・どの叙述を考えればねらいに到達できるのか、課題解決に迫る中心発問があれば、3の活動（指導案）で出されたものを、4の活動で絞って話し合えたのではないか。本時のように、6の場面の理解が十分でないと日記も続き話も書くことは難しい。
- ・本時はごんの心情の読み取りが抜けていた。「神様のしわざ」と言われてもまた出かけていく。あるいは、今までは家に入らなかったが、この場面では家の中に入っていったなど。「どこからごんの心情が変わったか。」と聞いても、子どもたちは十分考えられただろう。特に、「兵十はかけよってきました。」というところは、ここだけごんの視点になっていてごんのうれしかった気持ちが分かるので、視点の転換に気付かせたいところである。

☆話合い活動を焦点化

- ・どの叙述に着目して何を考えるのか、子どもたちには分からなかった。そのため課題解決まで行けなかった。「どう変化しているか。」を考えるための話合いの焦点化が必要。

【資料（単元を貫く言語活動を通した「読むことの授業改善」）について】

- ・授業で勉強したことが実生活に生きてはたらくようにする。
- ・単元を貫く言語活動を設定するとともに、物語を目的に応じて読むなど、場面ごとの読解から脱却を図りたい。（活動例は、後話や日記を書く言語活動と、きつねが主人公の物語を多読して感想を交流する言語活動を示している。）
- ・国立政策研究所の「言語活動充実のための指導事例集」を参考にし、小単元で実践することで「単元を貫く言語活動」とは何かを実践して理解を深めてほしい。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・「叙述を手がかりにして読みを深める」手立てについて活発な話し合いがなされた。心情をつかむ手がかりになる文や言葉は数多くあり、そこを児童に考えさせて授業を展開していくアイデアがいろいろ出され、充実した研修になった。
- ・「これからの国語」について考えるいい機会になった。単元全体を見通し、言語活動を重視しながら、ねらいへの迫り方を工夫していくような展開がこれから大事になる。

(2) 課題

- ・課題解決のためにどの叙述を考えさせるか、そのためにどんな学習活動にするかなど、焦点化していく必要があった。

国語科部会(高学年の部)

研究主題 たしかな言葉の力を身に付け、豊かに表現し合う子どもの育成
～ 思考を深める学び合いを通して ～

1 主題について

互いの立場や考えを尊重しながら、自分の思いや考えを適切に表現したり、言葉を通して適切に理解したりできる力を育てたいと考え本主題を設定し、確かな言葉の力を身に付けるための指導、思考を深めるための単元構成や学習過程等について重点を置き、授業研究に取り組むことにした。

2 今年度の取組

月 日	実践内容	月 日	実践内容
4月13日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	10月25日	第2回総合研究会 授業研究会(上川沿小学校)
9月30日	指導案検討会(上川沿小学校)		

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成23年10月25日(火)
- ・会 場 上川沿小学校
- ・単元名 6年「生活の中の敬語」
- ・授業者 佐々木 通

①授業者から

- ・敬語について取り組んだが、敬語はとても難しいと感じた。教師自身も悩みながら単元構成を考えた。児童の実態から発表力を付けたいと考え、友達同士で会話をする場を取り上げた。
- ・前授業では、敬語の種類や基本的な使い方を理解するために、ワークシートを活用した。
- ・本時では、内容カードをもとに会話場面を設定し、返す言葉も考えて会話文を作った。どの程度敬語の力が高まったのか、敬語を使って会話をする力がどの程度身に付いたのか、確かめる場として、評価問題を取り入れた。ほとんどの児童が正解であった。
- ・学習した敬語が身に付くように、様々な場面で意図的に話す機会を多く取り入れていきたい。

②協議

〈視点1「内容カード」をもとにして場面を考えて敬語を選び会話する活動は、敬語の種類分類や使い分けについての思考を深める手立てとして有効であったか。〉

- ・「内容カード」は「場面カード」とした方がよかった。場面に応じて色に分類すると子どもたちも日常に結び付けやすかった。
- ・教科書では敬語を使う側の話だけが取り入れられるが、一人の思考でなく、ペアで考えることを取り入れたのでよかった。
- ・相手が誰なのか、実際の人物、具体的な名前があれば場面のイメージがもっと伝えられた。
- ・ペアだけでなく、他の人とも会話する場面がほしかった。
- ・教科書だけでは深まらないので、授業者の先生が実際に会話できるカードを作成したことはよかった。

〈視点2 ペアや全体で発表し合いアドバイスし合う活動は、場面に応じて敬語を使う力をつけるための手立てとして有効であったか。〉

- ・敬語に直すことに一生懸命で話す場が足りなかった気がする。ヒントカードがない話し方は間違いなのか、心配になった子どももいたかもしれない。全体の場で、話し合う時間があつ

でもよかった。敬語は繰り返し話すことが必要である。役割演技をしたり、実際に来た先生方を相手にして敬語を話したりするなど場の工夫が必要である。

- ・振り返りで、「敬語は必要だ」「敬語を話すと気持ちよかった」と感想を書いた子どもがいた。今後敬語を使おうとする気持ちが育つのではないか。

(2) 指導助言（小林 寿 主任指導主事）

- ・敬語の学習は小学校低学年から始まり、中学校へつながっている。繰り返し学習しながら言語活動を螺旋的に高めていくことが重要であり、それが国語の特質である。
- ・敬語は〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の低学年イ言葉の特徴やきまりに関する事項の（キ）にある。高学年では（ク）にある。6年生においては日常の中で使えるようになることがポイントとなる。そして、中学校3年生までで敬語を社会生活の中で適切に使えるようになることが目標である。ゴールは小学校ではないことを念頭においてほしい。小学校においては声に出して話すことを中心に言語活動を展開してほしい。5年生においては習得を、6年生においては活用を重点にしてほしい。
- ・敬語は、相手を尊重する気持ちが大切である。相手を尊重する気持ちをはぐくみながら、繰り返し話させることで、敬語に関する知識・技能を身に付けさせたい。
- ・学習課題は、「敬語を使って会話しよう」でよかったのではないか。そして評価は、実際に話している様子で評価していく。
- ・指導計画や本時の実際の言語事項の評価欄での表記について、【伝・国・事項】ではなく、【言語に関する知識・理解・技能】（略しても可）と表記してほしい。
- ・内容カードはもう一工夫してほしい。場面や条件があればよかった。状況、背景、相手を提示すると、イメージが膨らんでくるのではないか。
- ・自力解決を大切にしてほしい。はじめに自分の考えをもたせてから、ペアやグループで検討をさせてほしい。本時はペアでお互いに発表→評価の活動を行っていたが、正解は何通りもあり、さらに受け答えをしながら評価も行うことは難しく高い能力を必要とする。例えば4人グループにして、2人のやりとりを残りの2人が評価する方法もある。工夫してほしい。
- ・自分より相手をあげると尊敬語、自分を下げると謙譲語となる。上下関係において敬語が発生する。見分ける方法としては、動作の主体（主語）を考えさせる。その動作はだれが行ったのかを問い、相手だったら尊敬語、自分だったら謙譲語になる。
- ・今日の授業で「敬語を使ってもらって気持ちよかった」と感想があった。大切にしたい感想である。現代の敬語に対する考え方は相互尊重が基盤となっているからである。
- ・敬語使用の一番のモデルは目の前にいる教師である。教師の話す言葉、校内掲示など言語環境を整えて意識して指導していく。授業だけでなく日常の積み重ねを大事にしていきたい。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・敬語の指導において単元構成や手立ての工夫や支援などについて協議し、研修を深めることができた。また、小中のつながりも明確になった。

(2) 課題

- ・相手や場面に応じて適切に敬語を使うことができるようにする敬語の指導は難しい。日常生活につながる指導方法を工夫していく必要がある。



【ペアで会話する場面】